



Title	被差別部落における教育と文化：漁村部落における青年のライフ・スタイルに関するエスノグラフィー
Author(s)	池田, 寛
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1985, 11, p. 247-273
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3850
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

被差別部落における教育と文化

——漁村部落における青年のライフ・
スタイルに関するエスノグラフィー——

池 田 寛

被差別部落における教育と文化

——漁村部落における青年のライフ・

スタイルに関するエスノグラフィー——

かつて被差別部落に集中的にみられた長欠や不就学は、すっかり影をひそめてしまった。また、一般地区とくらべてかなり格差のあった高校進学率も、なお差は残っているものの、しだいに平均的な水準に近づきつつある¹⁾。数字にあらわわれた結果を見る限り、被差別部落の教育水準は、ここ10数年のあいだに著しい向上をみせていると言うことができよう。このままの状態がつけば、早晚被差別部落の教育問題は解消してしまうのではないかという楽観的な予測があらわれても不思議はない。

しかし一方で、被差別部落の子どもの学力は依然として低位な状態にあることを示す調査報告がいくつか見られるし²⁾、低学力の克服や学力保障といった課題が、同和教育の今日的課題として重要視されていることもまた事実である。

はたして、部落の子どもの教育達成は、どの程度上昇しているのだろうか。通学率や進学率といった教育機会の拡大は、部落の子どもの学力水準の向上を直接反映しているのだろうか。同和奨学金等の援助によって、かろうじて現在の水準が保たれているのではないだろうか。

本研究が対象とした部落は、教育面での取り組みが大きく遅れ、そのため教育達成も周辺地区に比べかなり低い状態にある部落である。部落解放をめざした運動にも見るべきものがなく、住宅などの生活環境の改善にくらべ、人々の意識変革という点では多くの問題を残している。ひとくちに部落と言っても、解放運動の進展度に応じてその状態は大きくちがっており、運動のすすんだいわゆる「先進地」とわれわれが対象とした地区の問題を、同列に論じることはできない。しかし、ここで取り上げた部落が例外的な部落であるとは思われない。本論は、部落における教育達成とその背景にある社会文化的な要因を明らかにしようとするものであるが、ここで論じられる問題は、多くの部落が共通にかかえているものだと言うことができよう。

教育対策は、早くから部落解放の重要な課題のひとつとして位置づけられてきたにもかかわらず、部落の文化的水準と教育達成との関連に関する基礎的研究は、これまでほとんど手がけられることがなかった。学校がいかにすぐれた実践をしたとしても、地域での取り組みがなされないならその効果は半減してしまう。また、地域における取り組みに大きな力が注がれたとしても、学校との連携が十分保たれていなければ、その努力がむくわれることは少

ないであろう。被差別部落における教育問題は、学校を含んだ、地域社会全体の問題であり、究極的には、そこにおける文化をいかにして高めていくことができるのかという問題になっていく。この意味においても、われわれは、部落の教育達成にいかなる社会文化的な要因が関連しているのかを、具体的に明らかにしていかなければならないのである（なお、この研究は、大阪大学特定研究「被差別部落における教育機会の実証的研究」の一環として行なわれたものである）。

1. 野根の社会構造

今回の調査の対象地は、高知県東部に位置する東洋町H地区である。東洋町は昭和34年に旧甲浦町と野根町が合併することによって生まれた町である。現在の人口は約5,000人で、甲浦地区、野根地区がほぼ同数を占めている。H地区は、野根地区の太平洋岸に面した東北部にあり、昭和55年現在、世帯数は379世帯、人口は1,055人となっている。東洋町全体の人口の約5分の1、野根地区だけをとると、約5分の2の人口を占めている。東洋町内の被差別部落はこのH地区だけで、379世帯が狭い地域に密集して住んでいる。東洋町全体の人口は年々減少しており、典型的な過疎の町と言えるが、H地区だけは、逆に人口、世帯数とも横ばいの状態で、地区外への転住の困難さもてつだって、地区内の人口密度は依然として高いままである。

まず、このH地区がどういった性格の地区であるのかを、いくつかの特徴をあげながら説明していくことにしよう。

H地区の第1の特徴は、全世帯の約3分の1にあたる130世帯が、漁業によって生計を立てているということである（表1参照）。379世帯の中には、無職もしくは生活保護世帯が

表1 H地区の職業構成			
漁業	130世帯	(34.3%)	
日雇	44	(11.6)	
工員等	29	(7.7)	
運搬	14	(3.7)	
大工	14	(3.7)	
商業	8	(2.1)	
公務	8	(2.1)	
サービス業	5	(1.3)	
飲食業	3	(0.8)	
清掃業	2	(0.5)	
老人・無職	37	(9.8)	
生活保護	85	(22.4)	
計	379	(100.0)	

りの数含まれており、それを除く就業者世帯だけに限ると、漁業従業者世帯の割合は5割近くに達する。野根の一般地区には漁業従業者がいないことから、昔から「H地区と言えば漁師」というイメージが定着していた。漁業は、戦前からH地区の生業であった。当時は、「羽織漁師」と呼ばれていた地区外の資本家の手で地曳網漁が行なわれていた。H地区の人々は、それに雇われるかたちで漁業に従事していたわけである。戦後、そのような外部資本の排除をめざした新漁業法が制定されたことによって、地区住民を母体とする漁業協同組合が結成され、共同漁業権や定置漁業権が地区民のものとして

認められるようになったが、資本蓄積という点では大きく立ち遅れていたために、野根漁協の財政基盤は近隣漁協に比べきわめて脆弱なものであった。いまでも個々の漁家の独立度は低く、自営漁業者の割合は高知県下でも最も低い部類に属する。このように、共同漁業が大きな比重を占めていることが、野根の漁業のひとつの特色と言えるであろう。

新しい漁獲法の積極的な導入や経営近代化の努力によって、近年は比較的安定した経営状態にあるとは言え、基盤そのものはなお不安定であり、農耕地を全く持たない専業漁家が大半を占めるために、好不漁は地区の生活状態に直接影響を及ぼすこととなる。「登校した中学生の顔や態度を見れば、大漁不漁の察しがつく」と言われるほど漁業と生活の密着度は深い。

沿岸漁業を主体とするにもかかわらず、野根には長い間漁船を停泊させられるような港がなかった。漁港建設は地区漁民の長年の念願であったが、昭和51年に内港、59年に新内港が完成するにいたってようやくこの問題が解決したのである。もちろん、荒磯と砂浜の直線的な海岸線という自然条件の不利はあったにせよ、地区漁民の窮状に対する行政の理解の欠如という社会的条件も、港建設を遅らせる大きな要因になったことは否定できない。港は完成したが、その日の漁獲高によって生活が左右されるという状態を変えるためには、流通施設や加工施設等、なお多くの課題が残されている。

H地区の第2の特徴は、地区内において肉体労働従事者の占める割合がきわめて高いということである。商店などのサービス業やわずかの公務員を除くその他の人々は、漁業を中心に、土建業、日雇労働など、なんらかのかたちで肉体的な労働に従事しており、このうち漁業以外の労働者の賃金形態は、日給もしくは歩合給である。身体が健康なかぎり生活は保障されているが、けがや病気収入を失うという不安はつねにつきまとう。事実この種の仕事には、そうした危険が多いのである。

多くの人々がきびしい肉体労働に従事することによって、地域内には独自の労働エートスが生まれてくる。からだひとつが財産である労働者にとって重要なのは、頑強な肉体と威勢の良さである。慎重さや計画性よりも、度胸や思いきりの良さが重視され、時にははったりも必要になってくる。労働から生まれてくる、このような「男らしさ」を強調する文化は、おとなばかりでなく青年や子どもの生活信条にも深く影響し、浸透している。周囲の人々がH地区の特徴としてあげる気性やことばづかいのあらさは、多分にその労働形態からもたらされたものであると言える。

第3の特徴として、労働形態によって分化した内部の階層構造と権力関係をあげることができる。野根の漁業は大きく分けて次の4つの形態に分かれる。1つは大型定置（大敷）、2つめは小型定置（小敷）、3つめは一本釣、4つめはえび網、建網などである。現在2つの大敷組合と4つの小敷組合があり、この共同漁業従事者が全体の約4分の3を占めている。

定置従事者は、持株層とそうでない者に大きく階層分化し、生活水準の開きも大きい。一本釣は独立経営であるため比較的裕福な家庭が多いが、同じ独立経営であってもえび網や建網に従事する者は、規模が小さいために生活水準は低い。

以上の漁業従事者に、土建業従事者や日雇、生活保護家庭などを加えたH地区の階層構造は、図1のようになろう。

図1 H地区の階層構造

第1階層	大敷・小敷の持株層
第2階層	一本釣層
第3階層	土建業・平の舟子層
第4階層	えび網・たて網層
第5階層	日雇・生活保護層

この中で、第一階層と第二階層との間には大きな開きがあり、地区の権力構造の中核を占めるのはやはり大敷・小敷の株主たちである³⁾。これらの権力者は、地区の人々の日常生活にまで大きな影響力を及ぼしているが、漁業対策などをめぐり、大敷と小敷、さらにそれらと他の漁業者との間にトラブルや葛藤もしばしば生じている。特に、大きな勢力を占める2つの大敷組合のあいだには、勢力あらしをめぐる暗黙の対立関係があり、それが地区の社会構造を縦断している。

H地区の特徴の最後にあげておかねばならないのは、部落差別のきびしさと解放運動に対する人々の態度の問題である。高知県の東部にはいまだに古いかたちの差別意識が根強く残っており、高知県下でも中部や西部とくらべ差別意識が強い地域だと言われている⁴⁾。さすがに最近では露骨な差別的言動や態度を示す者は少なくなったが、結婚問題が生じた時などは、一般地区の側が縁切りをするという例もまれではない⁵⁾。さらに、近年は、このような封建遺制としての差別観念に加えて、ねたみ差別的な新しい差別意識が強くなっている。H地区でも、昭和45年以降住宅改善や漁業対策などの同和対策事業がすすめられ、それ以前にくらべ地域環境は著しく改善された。しかし、最大の問題は、このように地域改善事業が行なわれているにもかかわらず、実質的に運動を展開する団体が存在しないということである⁶⁾。外見上部落は豊かになり、生活水準の向上がはかられているように見えるが、教育や社会啓発などの取り組み、より根本的には、地域内外の人々の意識変革に対する取り組みは大きく立ち遅れている。一般地区だけでなく、H地区内にも「寝た子を起こすな」といったふんいきが強く、「同和」や「部落」といったことばさえタブー視されているのが現状である⁷⁾。

このような部落差別の存在、そして、それに対する人々の態度の問題が、これから述べることになる教育や文化の根底に横たわっていることを指摘しておく必要がある。

2. 教育達成の現状

野根には、小学校が2校、中学校が1校あるが、小学校2校のうち1校は生徒数5～6名

の小規模校で、野根の子どもの大部分は野根小学校に通う。生徒のなかでH地区生徒の占める割合は、小・中学校通じて75%前後と圧倒的多数を占めている。

さて、小学生の学力の状態を、野根小学校が昭和57年に実施した学力テストの結果によってみてみよう。図2は、2年から6年までの国語と算数の学力分布を、全国平均を基準にして3ランクに分け図示したものである。H地区生徒の学力の低さは一目瞭然、特に、3年から4年にかけての学力の低下が目立つ。4年以降は、両科目とも下ランクが半数をこえ、5、6年になるとそれが3分の2にも達している。

3年次をさかいに学力が低下する原因として、国語では3年次に新出漢字がいきよにふえること、算数では分数や小数の計算が登場することがあげられる。H地区生徒の父母は、義務教育学歴の者がほとんどであり、中学校も満足に卒業していない父母も少なくない。地域の聞き取り調査の中で、「3、4年生になると宿題をみてやれん」とか「勉強は学校の先生にまかせるしかない」という声がよく聞かれたが、十分な教育を受けられなかった親にとっては、小学校3、4年の時期は、認知的な面での教育力の限界を感じはじめる時期にあたるのである。

勉強みてやれたらみてやりたいんやけど、よう教えんきにねえ。子どもが学校からもどって、宿題でもやりだしたら、もう家によろらんようになって、なんど用事つくって

図2 野根の子どもの学力（小学生）

		国 語				算 数			
		下ランク	中ランク	上ランク	%	下ランク	中ランク	上ランク	%
2年	同和地区	11	72	17		12	44	44	
	地区外	33	67			17	83		
3年	同和地区	29	42	29		21	14	65	
	地区外	40	60			20	80		
4年	同和地区	56	26	18		56	41	3	
	地区外	25	25	50		50	50		
5年	同和地区	74	13	13		86	10	4	
	地区外	30	20	50		40	30	30	
6年	同和地区	64	21	15		75	19	6	
	地区外	24	38	38		25	50	25	

外に出ていかないかんよになんのよ。

父母は、子どもの教育に関心がないわけではない。むしろ、自分たちが十分な教育を受けられなかっただけに、子どもには人並みの教育を受けさせたいという願いは強い。ほとんどの親が、「勉強はしたか」、「宿題はやったか」と、子どもの勉強に口出しし、少しでも良い成績をとるようにと期待しているが、その口調は、自らの学力の低さのゆえに弱くならざるをえない。子どもにとっても、日常生活であまり使われない漢字や分数などがあらわれてくる時期である。この時期に、親の具体的な援助があるかどうかは、子どもの学習の進展に大きな影響を及ぼす。このように、H地区の子どもの低学力は、親の低学歴に起因するところが大きい。

H地区の子どもの低学力は、英語が新たに加わり、数学に新しい概念が登場する中学生になるとさらに悪化する。表2は、野根中学校卒業生の過去11年間の進路状況を示したものであるが、この間に中学校を卒業した344名のうち、H地区出身生徒（245名）とそれ以外の生徒（99名）の高校進学率は、それぞれ61.6%（男子58.3%、女子64.8%）、84.8%（男子85.2%、女子84.4%）となっている。H地区生徒も昭和50年から2年間ほど80%程度の高校進学率を確保しているが、昭和51年度と52年度の高校進学者のうち高校中退者は6名を数えている。

高校進学率の推移をみてわかることは、この11年間を見るかぎり、H地区生徒の進学率は年度とともに上昇の傾向にあるとは言えないということである。つねに30%から40%の割合で高校非進学者が存在し、ここ数年はその傾向が定着しているようにさえ思われる。さらに、H地区生徒の進学先を見ると、Dランク高に集中しているということに注目する必要がある。AからDまでのランクは、野根の子どもが進学した学校を、成績の良い者が進学した高校から順にカテゴリー化したものであるが、Dランク高にあたるのは東洋町内にある1校だけである。昭和45年に、それまでの定時制から全日制に切り替えられたこの高校は、1学年20名たらずの分校である。この高校ができたことによりH地区からの高校進学者はいっきょに増加したが、東洋町の子どもや親からいわゆる「落ちこぼれ」を収容する学校とみなされ、進学が好まれない傾向がある。東洋町に限らず一般的に部落の子どもが進学する高校は、このような低いランクに偏りがちである。

進学先の高校もさることながら、全国平均が90%をこえている高校進学率が、H地区では60%前後にすぎない。もちろん、このような進学率の低さの原因は、なによりもまずかれらの低学力にあるわけであるが、H地区の子どもの生活を観察しているうちに、個人の能力や努力、あるいは親の態度といった個人的次元の問題もさることながら、それをこえたところにこの問題の本質があるのではないかと思うようになってきた。つまり、低学力や非進学は、

個人の「現実認識の方法」と深い関連を持っており、この「現実認識の方法」は、H地区の人々に共有されている下位文化からもたらされたものであることがわかってきたのである。

この意味で、H地区における低学力・非進学の問題は、個人的な問題ではなく、集団的な問

表2 中学卒業生の進路状況

	同 和 地 区 生 徒							地 区 外 生 徒						
	A ラン ク	B ラン ク	C ラン ク	D ラン ク	職 訓 ・ 他	就 職	進 学 率	A ラン ク	B ラン ク	C ラン ク	D ラン ク	職 訓 ・ 他	就 職	進 学 率
昭和 48 年度	0 1	0 0	2 0	3 6	0 0	6 11	45.5 38.9	5 2	0 0	5 1	0 1	0 1	0 1	100.0 66.7
49	2 0	1 0	0 1	4 2	0 0	7 8	50.0 27.3	0 1	0 0	2 0	0 4	0 1	2 1	50.0 71.4
50	1 3	0 1	0 1	2 7	1 0	2 1	50.0 92.3	0 0	0 0	2 0	0 0	0 1	0 0	100.0 0.0
51	1 4	0 3	1 0	7 6	2 0	0 2	81.8 86.7	2 3	1 0	2 1	2 0	1 0	0 0	87.5 100.0
52	0 0	0 2	0 0	6 5	0 1	2 2	75.0 70.0	0 2	1 0	0 0	2 0	0 0	1 2	75.0 50.0
53	2 2	0 1	0 0	3 3	3 0	0 2	62.5 75.0	3 1	1 1	3 0	0 0	0 0	0 0	100.0 100.0
54	0 3	1 2	1 0	2 7	1 0	5 2	40.0 85.7	1 1	0 2	0 0	1 0	1 0	1 0	75.0 100.0
55	3 1	1 3	2 0	1 3	2 0	3 5	58.3 58.3	1 2	1 3	1 0	2 0	0 0	1 0	83.3 100.0
56	1 0	0 1	1 0	3 6	0 0	4 3	55.6 70.0	1 1	1 1	1 1	0 1	0 0	0 0	100.0 100.0
57	2 0	3 2	0 0	7 4	2 0	1 5	76.9 54.5	1 2	2 3	2 0	0 2	0 0	0 0	100.0 100.0
58	1 0	3 2	1 1	4 0	4 0	4 2	52.9 60.0	0 2	0 0	0 0	0 0	1 0	0 0	0.0 100.0
計	13 13	7 17	8 3	42 48	15 1	35 43	58.3 64.8	14 17	7 10	18 3	7 8	3 3	5 4	85.2 84.4

(注) 上段の数字は男子，下段は女子をあらわす。

題であると言える。それでは、低学力・非進学を規定する心理的・文化的要因としてどのようなものがあるのかを、以下で考察していってみよう。

特措法以後、地区の生活環境の改善はめざましく、いまや周辺地区と比べても、H地区の生活水準はさほど見劣りしないほど向上してきている。しかし、住居の新築や営業トラックの購入の際に、多額の資金を借り入れている家庭が多く、その返済で家計は大きな圧迫を受けている。奨学金等が整備されている今日では、経済的に困窮していることが進学・非進学に直接結びつくということは少なくなっているが、自分の家庭が経済的に苦しい状態にあることを多くの子どもたちは認識しており、しばしば子どもの口から「自分の家は貧乏だ」という声が聞かれた。H地区の生活水準は、かつてと比べかなり上昇したとは言え、生活の安定度という点では決して十分とは言えない。このような生活の不安定さが、学習意欲や進学意欲を低下させる要因のひとつになっていることは疑いえない。

しかし、子どもたちの意識の中にある貧困感とは、現在の生活を反映したものであると同時に、過去の生活の「残像効果」とみなしうるようなものも含んでいる。そのなかには、親の世代が貧困生活の中で身につけてきた生活感覚が、子どもの意識に投影されているものもあるし、子ども自身の幼い頃の記憶が消え去らずに残っているものもあるであろう。こういう残像効果が生じる原因として、われわれは、さらにH地区を取り巻いている状況を理解しておく必要があるだろう。つまり、ここ数年のあいだにH地区の生活状態は大きく改善されたとは言え、周辺地区の人々のH地区に対する評価やイメージは、それによって簡単に払拭されるようなものではないのである。長い歴史の中で形成されてきた差別観念は、依然として、H地区の生活や文化を低位なものとみなす態度を存続させており、それは、ことばや消費行動などのH地区特有の行動様式や文化を非難するかたちで、H地区の「生活の質」そのものの低位性を強調する。このような周辺地区の人々の態度や行動は、H地区の経済状態の低位性を直接意味しないとしても、H地区の住民にとっては、自らの生活全体のレベルが低いのだということを意味することになり、自分たちはまわりよりも低位な生活状態にあるのだという意識が持続することになるのである。

現在の生活の不安定性やH地区をめぐる社会関係からもたらされたこのような「貧困感」を、低学力・非進学の第一の規定要因として指摘できるであろう。

非進学と関連する第2の心理的・文化的要因としてあげられるのは、H地区の人々の意識の中にある「学歴無効感」とでも呼ぶべき感覚である。学歴に対する態度には、次にあげた漁師のことばに示されているような、一種の信念に近いものも含まれている。

漁師をやるのに、頭は二の次や。一番大事なもんは体や。力が強うないと漁師はつとまらん。おまえらみたいな腕しゅったら、皆といっしょに仕事でけんぞ。それから肝心な

もんは度胸や。根性がしっかりしちょらな漁師にはなれん。しけた海へ飛び込んで、山よりも高い波がある時に海へもぐって網をくくらないかんこともある。そんな時に波をおじよったら漁はできんぞ。その次に大事なもんが頭やな。人の上に立ったら、責任もって人を使わないかんし、下の者の言うことも聞いちゃらないかん。それには頭もいるが、そやけど大事なもんは、腕と肝っ玉や。それがなかったら漁師はできん。

過酷な肉体労働に従事している者にとって、学歴や学校で身につける知識、教養は、まさに「二の次」なのである。しばしば聞かれた、「高校を出てきても、わたしの仕事には使いもんにならん」ということばは、学歴に対するかれらの態度を象徴している。しかし、学歴一般を無意味とみなしているわけではない。自らの労働体験からもたらされる学歴観とは別に、子どもの教育に関して多くの親は、とにかく高校までは行ってほしいという期待を持っている。それにもかかわらず、親の期待と子どもの教育達成にぐちがいが生じるのは、親の労働生活において学歴が重視されないということと同時に、より高い学歴を得ることが社会的に有用なのだという実感が、子どもの側に希薄だという点にあるように思われる。

かれらは、大学卒業後郷里に帰った先輩が何年も定職につけなかった例をいくつか見ているし、高校進学した者の何人かが毎年中退していくのを知っている。もちろん高校や大学を出て、順調に就職して都会に出ている者もいるが、小学生や中学生が日常的に接するのは、Uターンした半失業者であり、高校を中退した青年たちである。子どもたちは、身近かな他者観察を通じて学歴の効用をはかるすべを中学生の頃から身につけているのである。

中学生に将来つきたい職業をたずねると、学歴ラダーをたどる着実な経路とかけはなれた答えが返ってくる。それは、現実離れした夢であることが多いが、見方を変えれば、学歴に重きをおかない者がえがきうる現実味を持った夢であると言うことができる。ここに2つほどその例を示しておこう。

何をやりたいかと言うたら、高校へ行ってプロ野球の選手になることやなあ。野球の選手は給料ええやろ。それがいかだったら、北海道で牧場やってみたいんよ。カウボーイみたいに馬に乗って牛を追うたらカッコええぞ。三番目になりたいのはコック。料理したりするのは好きやし……。

なりたいもんか。いまなりたいのはレーサーよ。バイク好きやきに。トヨタ自工へ就職してレーサーになればええな。それがいかんかったら、自動車の修理工になりたいな。

かれらの将来設計は、夢と具体的な現実とに大きく分裂し、その中間が欠落しているところ

ろに特徴がある。他の子どもたちが考えるような、学歴をたどって組織社会へ参入するというキャリア設計は、かれらにとって縁遠いものである。なぜなら、身近かなモデルのなかにそういった「堅実な」なキャリアをたどっている者は少ないからである。家族、親族、近隣集団、そして友人集団のネットワークを通じて、個人の人生設計は具体化してゆくが、H地区の子どもたちを取り巻くネットワークの中には、学歴が有効であることを示すモデルがほとんど含まれていないのである。

非進学と関連する第3の心理的・文化的要因は、自らの学校体験を通じてもたらされた「学校不適切感」とでも呼ぶべき感覚である。非進学者の多くは、すでに小学校の3、4年生頃から学力不振におちいり、その後は全く理解できない授業に耐えながら学校時代をすごしてきた者たちである。その間に、満足感や達成感を味わうことが皆無であったわけではないが、それよりもはるかに自尊心を傷つけられ、自己貶下 (self-degradation) を味わうことが多かったのではないだろうか。このように、学校生活のかなり早い時期から疎外された状態におかれたかれらは、そもそも何かを学び身につけるという行為は自分には「向いていない」のだという確信を持つようになる。そして、やがてそれは、文字文化や思考という行為そのものから自己を遠ざける態度へと発展していくことになるのである。

3. 学校文化への反抗

H地区の教育達成は、これまで述べてきたことから明らかなように、一般地区と比べてかなり低位な状態にある。すでに小学校の低学年の時期から低学力におちいった子どもたちの意識の中には、しだいに「敗北者」としての自己観念が沈澱してゆき、自らを学校には不向きな存在とみなすようになってくる。このような態度は、往々にして、自己の認知的な能力の発達そのものを否定するような態度へと結びついてゆく。かれらは、勉強以外の領域でしか自己の存在価値を示せないことを早くから知るようになり、かれらなりの自己表示のしかたを身につけてゆく。体力のすぐれた者は腕力によって、口達者なものはことばを武器として他者を圧倒し、ひょうきん者はまわりの笑いをさそうことによって、自分を際立たせようとする。教師もまた、一人ひとりの持ち味に応じた取り扱いをすることにより、学力の劣る者にとってもそれなりに学校生活が満足のいくものとなるように、最大の努力をはらう。

しかし、学力が劣るということによって傷ついたかれらの自尊感情 (self-esteem) は、そのようなことで容易に癒されるものではない。かれらは、学校が何を重視する場であるかをよく知っており、勉強以外の領域でいかに自己を際立たせたとしても、それは傷ついた自尊感情をぐまかすためのものであるということを敏感に感じとっているのである。

それでは、かれらにとって小学校や中学校時代は、片隅においやられた、暗くてみじめな時期なのだろうか。われわれは、中学校の卒業生に学校時代のことで思い出として残っていることを聞いてみた。かれらの答えは、予想に反して、その大部分が楽しい思い出によって占められていたのである。たとえば、教師をからかったり、反抗したりしたこと、校舎や器物を壊したこと、また、授業をさぼったりタバコやシンナーをすったことなど、学校を混乱させるような逸脱行動に関するできごとが、学校生活に関するかれらの思い出の多くを占めており、それについて語る時、かれらの表情は生き生きとしている。かれらと学校との関係を、植民地における「原住民」と「征服者」の関係になぞらえるのは無理があるとしても、かれらの行動は原住民による「反乱」もしくは「主権回復運動」と一脈通ずるところがある。勉学的価値を中心に構成され、つねに自らを抑圧するところの学校世界に対して、逸脱的な行動をとることによって抵抗の姿勢を示しているのである。少なくとも、学校秩序に混乱をひきおこすことによって、かれらは一時的にであれ、状況を動かす主導権を自分たちが握っているのだということを実感しようとしたのではないだろうか。

しかし、このような積極的な「主権回復」の戦術がとられるのは、1年に1度か2度、あるいはかれらの企てが成功するのは数年に1度ぐらいのものであろう。むしろ日常的に用いられるのは、より消極的な戦術である。学校には、校則で定められた規則以外に、ベルが鳴れば教室にはいり、教師が来るのを静かに待たなければならないとか、授業中は教師の言動に注目し、黒板をみつめたりノートをとったりしなければならないといった、暗黙のきまりのようなものがある。そして、それは、学校における最も重要な活動である教授—学習行動が成立するために欠くことのできないものである。学校に適応し、それによって自己のキャリア設計を行なう者にとっては、このような暗黙の前提というものを承認しそれに従うことは自明のこととなるが、学習を放棄し、学校の権威の正当性を否定する者にとっては、必ずしもそれは自明のことではない。もちろん、このような暗黙の規則に対する違反にも、授業の進行を妨げるようなかたちで行なわれる場合には、強い制裁が加えられるが、教師によって許容範囲にちがいがあ

る。学習から疎外された低学力の生徒たちは、仲間と話をしたり、授業とは関係のない自分の仕事に没頭したり、ぼんやり窓の外をながめたりすることによって、授業の前提となる「学習する行動」とは全く逆の「学ばない行動」を示す。これらの行動は、かれらの側からみれば、意味の見い出せない授業へおとなしく従うことにより、自分の意志や行動が教師の意のままになっていることを否定し、かれらなりの自由や主体性を確保するための試みであると言えることができるだろう。

しかし、教師の権威に反抗したり、学習から撤退することにより主体性を確保したとしても、しょせん学校の中ではかれらは学校文化になじめない逸脱者であり、落伍者でしかない。

勉学的価値が絶対的に優位な位置を占める学校世界においては、生徒たちは一元的に評価されタイプ化されがちである。つまり、かれらは学習についてゆけないため、勉学そのものに背を向け、教師や学校の権威に反抗するのだと。低学力が学校での反抗の元凶だとみるこのような見方は、かなり妥当なものだと言いうことができるが、低学力じたいが、学校や学歴に対する人々の見方によって規定されるものであることは、あらためて述べるまでもないだろう。われわれは、低学力や反抗といった問題を、学校教育や学校組織の枠内にとどめることなく、生徒が背負っている文化と学校文化との関係という文脈の中に位置づけて考えてみる必要がある⁸⁾。

文化のとらえ方にもいろいろな次元があるが、ここでは、R. ウィリアムズの分類にしたがって、「社会生活のあり方」と定義しておく。ウィリアムズは、この種の文化の分析は、「生産の組織、家族の構造、さまざまな社会関係を表現あるいは規定しているさまざまな制度の構造、その社会の構成員がコミュニケーションする時の独自の形式」の分析を含むものであると述べている⁹⁾が、以下では、青年の地域生活を素材にして、このような文化の分析を試みてみようと思う。

4. 青年集団の形態

われわれは、これまで数度にわたって、H地区において中学3年生を対象とした「学習会」を行ってきた¹⁰⁾。学校生活に関するこれまでの記述は、それに参加した者からの聞き取りをもとに構成したものであるが、地域での生活に関する以下の記述は、かれらと行動をともにし直接観察したデータにもとづいたものである。

表3は、主たる調査対象とした昭和57年度中学卒業生の一覧である。「学習会」に参加した者については、学力のおよそのめやすとして、小学校中学年時に習得すべき分数計算と中学1年時に習得すべきマイナス符号のはいった式の計算の理解度を示しておいた。われわれは過去2年半にわたって、これらの青年たちの地域での生活を観察してきたが、その交友関係をソシオグラムにしてあらわすと、図3のようになろう（ここではとりあえず男子の交友関係を示した）。

まず、ソシオグラムに表3の中の⑨や⑪の生徒があらわれないことを指摘しておこう。⑨⑪の生徒は、中学時代の成績もよく、上位ランクの高校に入学したいいわゆる「優等生」である。かれらは、同じH地区の生徒ではあるが、D高に進学した者や非進学の者とのあいだの交流はほとんどない。特に高校進学後はその傾向が著しい。また、H地区以外の青年がほとんど含まれていないことにも注目する必要があるだろう。実は、表3中の地区外生徒（男子）は全員高知市内の高校に進学しており、高校入学後の交流は物理的に不可能であるが、中学時

表3 昭和57年度 中学卒業生のプロフィール

	父 職	進 路	学 分 数	力 マイ ナス		父 職	進 路	学 分 数	力 マイ ナス
男子1	郵便局職員	B			女子19	理 容 業	A	○ ○	
(2)	衛生センター職員	D	○ ○		(20)	出 か せ ぎ	D	○ ○	
(3)	(母 子 家 庭)	職 訓	× ×		(21)	運 転 手	D	○ △	
(4)	無 職	B			(22)	漁 業	D	○ △	
5	郵便局職員	A	○ ○		(23)	旅 館 業	就 職	○ △	
6	公 務 員	C			24	公 務 員	B	○ ○	
(7)	運 転 手	D	○ △		(25)	漁 業	就 職	△ △	
(8)	出 か せ ぎ	D	○ ○		(26)	無 職	B		
(9)	漁 業	A	○ ○		(27)	運 転 手	就 職	× ×	
(10)		D			(28)	漁 業	就 職	× ×	
(11)		A			29	旅 館 業	B		
(12)	漁 業	D	○ ○		30	営 林 署	A	○ ○	
(13)	衛生センター職員	D	○ △		(31)	(母 子 家 庭)	D		
(14)	運 転 手	B	○ ○		32	農 業	D		
(15)	建 設 業	D	× ×		33	公 務 員	B	○ ○	
(16)	漁 業	就 職	× ×		(34)	旅 館 業	D		
(17)	漁 業	漁船員 養成所	× ×		(35)	漁 業	B	○ ○	
18	農 業	C			(36)	漁 業	就 職	○ △	

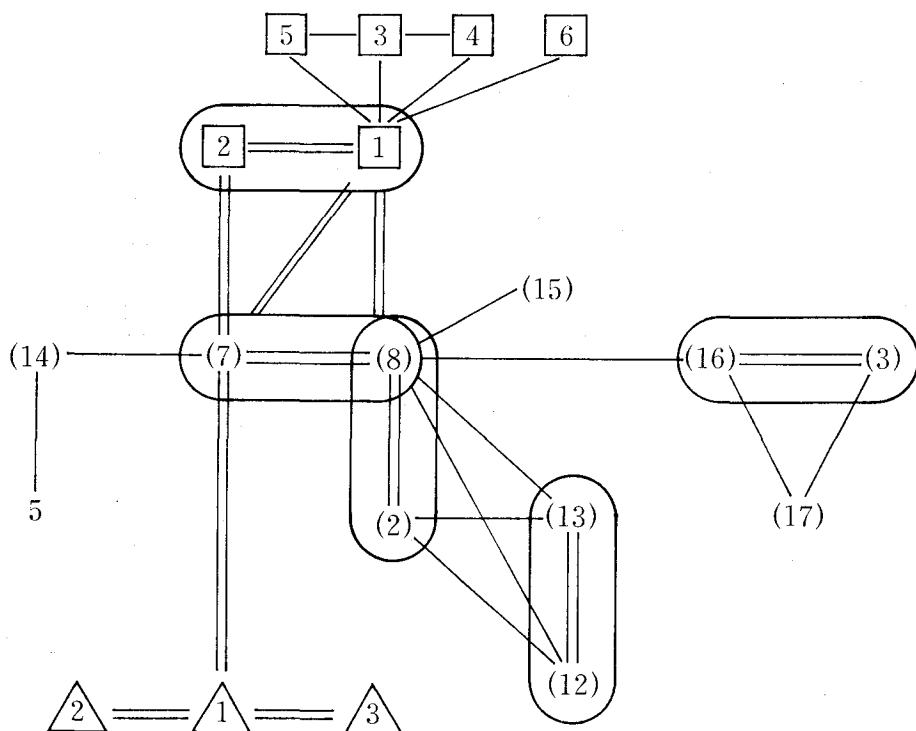
(注) 1. 番号のうち () のついたものは、H地区生徒を示す。

2. 学力で ○印 はよく理解している、△印 はやや不確かではあるがなんとかできる、
×印 はほとんど理解していない、ことをあらわしている。

代にもH地区生徒とかれらの交流は、5の生徒以外にはほとんどみられなかった。さらに、1学年上、あるいは1学年下の者が数名ソシオグラムに登場するが、かれらも、⑤の青年をのぞくとすべて非進学者かもしくは高校中退者である。以上のことから明らかなように、地域での交友関係をあらわしたこのソシオグラムは、大部分がD高生と高校非進学者によって構成されており、これらの青年たちは他と区別されるかたちで一群の集団を形成していることを示している。

地域での生活は、H地区の青年にとって想像以上に重要な意味を持っている。かれらは仲間との関係を通じて、家庭や学校では得られない多くのことがらを学んでいるのである。図

図3 交友関係のソシオグラム



(注) 1. () 印は昭和57年度卒業生で表3中の番号に対応する。□印は1学年上、△印は1学年下の卒業生である。

2. () で囲んだものは「ツレ」の関係を示す。

3には、(7)、(8)を中心に、その同一学年と前後の学年の者が含まれているが、かれらにとって学年のちがいは交友関係をさまたげるものではない。幼少時からともに同じ地域ですぐし、学年が1、2年ちがっても、「ケン」とか「リュウ」というように、名前を呼びすてにする習慣が身についているようである。自分たちの仲間を指す時に、かれらは、「おらら」とか「野根の者」という言い方をする。「おらら」ということばは主として青年世代を意味しているが、「野根の者」と言う時は、おとなも含めてH地区の者の行動や価値を規定する地域の文化がその中に含意されている¹⁾。本来は、被差別地区であるH町という地名が使われるはずであるが、「H町の者」という言い方は意識的にかあるいは無意識的にか、あまり使われない。

青年仲間のあいだではたがいに「あいぼう（相棒）」という呼びかけがなされる。これは、H地区以外の者にはめったに用いられない。日常的な接触のないH地区の青年に対しても用いられることがあるので、もともとは地区の青年に共通する呼びかけであったと思われる

が、最もよく用いられるのは、ソシオグラムに登場する仲間のあいだである。仲間どうしの強い共属感が存在していることをうかがい知ることができる。ただし、日常的な行動形態として、これらの仲間が10人ほどの単位となって共に行動するということはあまりない。行動単位となるのは、通常より小さい「つれ」と呼ばれる2～3人の単位である。

H地区の仲間関係の特徴は、いとこどうしの「つれ」が多いということである。たとえば、(7)と(8)は母親どうしが、(13)と(12)は父親どうしがきょうだいの間柄である。親の世代はきょうだい数が多く、しかもその多くが他出せずに地区内にとどまっているため、子どものあいだでいとこ関係の複雑なネットワークが形成されることになる。しかし、中学卒業後、というよりは、中学3年時の進路決定の頃から「つれ」の関係に大きな変化があらわれる。つまり、進路を同じくする者が「つれ」を形成し、進路のちがいによって交友関係が縦断されるようになるのである。たとえば、(7)(8)(12)(13)はともにD高へ進学した者であるが、かれらとBランクの高校へ進学した(14)との間には、それまでのような交流がみられなくなり、同様の現象が、高校へ進学した者と、(10)(3)(17)の非進学の者の間にも生じている。

それでは、H地区の青年の仲間関係は、中学卒業後進路の分化によって分断されてしまうのだろうか。もしそうだとすれば、H地区の青年にとって、地域生活あるいは仲間との交流はそれほど大きな意味を持たないと言ってよいだろう。実際は、中学卒業後もソシオグラムに示したような仲間関係が持続し、かれらの行動や価値観に少なからぬ影響を及ぼしているのである。

地域を基盤として仲間関係が維持されるひとつの理由は、非進学者の側にある。非進学者もすべて中学卒業時には、就職や職業訓練所へ入所するというかたちで進路を決定し、その方向に進む。しかし、就職した者の多くは数か月後には離職し、地元に戻ってくるのである。昭和57年度卒業生の(10)、一学年上の①③④⑥らはこのようなUターン組である。かれらは再びいい仕事が見つかるまで親元ですぐすことになるが、その期間が1年から2年に及ぶことも少なくない。このように、H地区には失業状態にある青年が他の地区よりも多く滞留し、地域における青年文化を支えているのである。

H地区の青年集団も構成するもうひとつの勢力はD高生である。学校からはなれ、いまは失業中である青年と、高校生であるD高生との間にいかなる共通項が存在するのか。たしかに、両者には、「社会人」と「学生」という立場上のちがいはあるが、多くの点で似かよったところがある。それを端的に示すのは、ソシオグラムの中の②や(7)や△の青年たちである。かれらは、いずれも高校へ進学したにもかかわらず中退してしまった者たちである。退学の理由は、高校生活が「退屈」で「おもしろくない」からである。表面上は、単位を落として進級できないということが退学理由としてあげられるが、かれらには、3年間高校生活を送るということがどういう意味を持つかが理解できないのである。中学校時代と同じように、

わからない授業に耐えて毎日をすごす。決った時間に登校し、6、7時間学校の中に拘束されて、決った時間に家に帰る。そこには何の変化もなく、自らのエネルギーを燃焼させるものもない。かれらにとって、そのような単調な生活を3年間もつづけることは、「退屈で死にそうなこと」に感じられるのである。

たとえ退屈であったとしても、それが将来の何かにつながるとしたら高校生活をつづけることも意味があることかもしれない。しかし、H地区の青年には、高校卒業資格はさほど重要なものには思われないのである。かれらは将来のことを明確に見通しているわけではないが、少くとも、卒業することによって展望が明るくなるとは考えていない。

卒業してもどうせスーパーの店員か運送の仕事やろ。それやったら学校やめて働いたほうが金がもうかるし、好きなことができるし……。

ほんまに高校出たらええ会社就職できるか。そやけど、会社へ勤めてもいかなあ。じっとすわって仕事したりすんのはすかんし、やっぱり、体動かすような仕事になるやろなあ。

現在の生活が「退屈」なものであり、将来に対して展望が持てないのは、中退者だけでなく、程度の差こそあれD高生に共通するものである。そして非進学の失業青年も、より深刻なたちで、将来の展望をとざされた状態におかれている。D高生と非進学者が、地域においてひとつの集団を形成し、互いに親近感を持つのは、かれらがおかれている立場に共通するところがあるからである。かれらにとって、「現在」は、将来の職業や家庭生活の準備をする時期というより、好むと好まざるにかかわらず、仕事をしたり家族を養っていかねばならなくなる時までの、単なる「待機」の時期であり、遊ぶことを許された短かい役割猶予の時期なのである¹²⁾。

5. 青年のライフ・スタイル

それでは、H地区の青年たちは、地域においてどのような生活を送っているのだろうか。以下では、かれらに独特なライフ・スタイル¹³⁾に焦点をあてて、仲間集団のもつ意味を考えていってみよう。

すでに述べたように、かれらが日常的に行動を共にするのは、「つれ」と呼ばれる2～3人の仲間である。特別にひとりですることがない限り、かれらは「つれ」の家に集まり、学校や家庭のできごと、音楽やタレントのことなどを話すことによって「ヒマをつぶす」が、

かれらが特に関心を示す話題がいくつかある。

まずひとつは、地区の仲間に関することがらである。互いに家族のことまで熟知している仲であるが、それだけに、かえって仲間のちょっとした変化にも敏感になるのである。たとえば、だれかが新しい型の服を買ったとか、新しい髪型にしたという情報は、1日かそこらで仲間のあいだに広がってしまう。かれらにとって服装や髪型のスタイルは、われわれが想像する以上に重要な意味を持っている。かれらが好むのは、いわゆる「ツッパリ」スタイルである。特定のはっきりした「ツッパリ」の型があるわけではないが、角刈りやリーゼントやパンチ・パーマが「ツッパリ」で、丸刈りやふつうの長髪は「ダサイ」髪型とみなされる。「ツッパリ」は、額に少しカミソリを入れ、マユも半分ほど剃り落す。ズボンはスリータックやフォータックのダボダボ型で、すそは細くしぼる。学生服のズボンはすべてこの型である。上服もひざ近くまである長いものが多く、裏地には刺しゅうの模様が施されている。

形態的にみると、上記のようなスタイルは、反抗型の青年文化に共通する、一種の流行のようなものである。それは、かれらの社会的な立場を表現するのにふさわしいものである。そして、同じ立場にある者とそうでない者を区別する際に、そのスタイルは一種のサインとしての役割をする。

(9)はおららあといっしょに遊ばんやろ。あれらあは勉強うようできるきんなあ。学生服もおららあのはこんなやけんど、あれらあのはふつうの学生服よ。(9)や(11)は髪型もだいたいダサイやろが。あれらあは、教師に気に入られちょきになあ。

(9)や(11)は同じH地区の生徒であるが、成績もよく、この地域ではAクラスの高校に進学した者たちである。このような生徒は、「ツッパリ」の仲間とはみなされない。同じ地域の者を識別するために用いられるこのようなサインが、他の地域の者に適用されることもある。

スタイルが仲間を同一化するためのサインとして用いられる例を、ひとつ紹介しておこう。野根から20キロほど離れた町に買物に出かけた時のことである。スーパーマーケットの入口付近にいた高校生らしき2人づれに、筆者といっしょに行ったH地区の4人が近づいて行き、何か話しはじめたのである。最初は相手を威圧するような態度で接していたが、そのうち笑顔もまじえて4～5分ほど楽しそうに話した後に、最後には相手の肩をたたいて帰ってきた。かれらに、「知り合いだったのか」と聞くと、そうではなく、「きょうはじめて会った」のだという返事が返ってきた。

全然知らんやつやけんど、あれらあもおららあといっしょでツッパリよ。かっこうみたらわかるやろが。ケンカすると思たやろ。ちょっとあいさつしてきただけよ。

われわれには一見区別がつかないような特徴でも、かれらなりの嗅覚でそれをかぎ分け、仲間であるかどうかを判断する。かれらは、自分たちと同じような状況にある者を識別する特有のアンテナを持っており、そういう者だけに通じるサインでお互いに交信し合うという特殊な才能を持っている。

かれらが興味を示すもうひとつのものは、バイクである。高校生ぐらいの年齢になると、中古のバイクを手に入れ、それを乗りまわすことが主な遊びとなる。しかし、バイクは単なる遊びのための道具以上の意味を持つものである。交通の便が悪いこの地域では、クルマが生活必需品のひとつになっているが、高校生にとっては、バイクが移動を可能にしてくれる最大のものである。学校規則は高校生のバイク使用を禁止しているが、H地区の青年に限らず、この地方でバイクを使用しないということは、自由な移動をあきらめるということを意味する。交際範囲が急速に広がる青年期に、移動の自由を奪われることは、行動の自由そのものを奪われることに等しい。1日に数本しか運行しないバスは、とうていかれらの移動欲求を満足させるものではない。

しかも、野根には、青年を魅きつけるような施設や場所は皆無に近い。かれらは、レコードやプレゼントひとつ買うにも数キロはなれた町に出かけなければならないのである。単調で、しかも、ほとんどの人が顔見知りの野根の町で1日中過ごすことは、青年にとって苦痛以外の何ものでもない。

野根にはなんちゃあおもしろいものないやろ。ずっと野根におったら、ほんまに退屈で死にそうになるぞ。ほうやきに、おらあいつでも、なんどおもしろいことでもないかいなあとと思うんよ。

その点、バイクは好きな時に好きなところへ自分を運んでくれる。行動の自由を与えてくれるとともに、スリルやハプニングも体験させてくれるのである。

バイクには、実用的機能とともに、象徴的な機能も備わっている。それは、服装や音楽などとならんで、青年のスタイルの重要な構成要素である。バイクを所有すること、それを乗りこなすことは、青年の特権であるかのように思われている。かれらは、バイクが青年文化の象徴であることを示すために、さまざまな加工を加える。バイクを手に入れると、友人や知り合いがいる修理工場へ持って行き、マフラーやハンドルを改造したり、タイヤを取りかえる。さらに、ボディを赤や紫に塗りかえ、暴走族風のシールを各所に貼り、おとなが乗るバイクとは全くちがったものにしようとする。

それでは、ここで、以上のような青年のスタイルが持つ意味を整理してみることになろう。H地区の青年のスタイルを構成する具体的素材(material)としては、一応つぎのようなも

のがあげられる。①服装や髪型などの身なりに関するもの、②バイク、③レコード・テープ・ステレオ・ギターなどの音楽に関するもの、④シンナーやタバコ、⑤儀礼的な行動様式、⑥特有なことば。これらの素材によって表現される意味として、つぎの3つがあげられる。

第1に、それぞれの素材は、仲間のあいだでの相互作用の媒介物となる。青年たちはこれらの素材を通して集まり、それを共有することによって仲間としての共属感を高める。先に指摘したように、他地区の青年であっても、同じような素材を共有している場合には、仲間意識が芽ばえる可能性がある。

第2に、これらの素材は、他の世代に対する青年世代の独立性を表現するものでもある。同じ素材を共有することによって、仲間の内での同一化がはかられると同時に、他の世代、とくに親の世代に対して、青年集団の存在を印象づけ、認めさせるような役割を果たす。これは、H地区の家族構造と関連する問題である。H地区の父親は、一般的に、「厳しく、かつ強い」ことを誇りにしており、中学生でも、父親から厳しい体罰を受けることはまれではない。それに対して、母親は、干渉過多の傾向があり、青年たちからは「口うるさい」存在とみなされている。親がこのような態度をとる背景として、その子どもを育てておかねばならない。H地区の親は、目をはなすと子どもは何か悪いことをするのではないか、人にめいわくをかけるようなことはしないだろうか、という危機感を強くいだいている。そのため、子どもを親の統制下においておこうとする意識が強く働き、子どもの行動を物理的に規制するという結果におちいることになる。

児童期までは子どももこのような親の統制に服しているが、独立性や自由を志向する青春期になると、親の規制は逆に反発を生み、親の統制をのがれようとする傾向がしだいに高まってくる。青年集団は、このような親からの逃避の場を提供するという機能を果たすることになるのである。

最後に、青年のスタイルの持つ第三の意味を指摘しておこう。第一・第二の意味が対内的な意味であるとすれば、第三の意味は対外的な意味とすることができる。青年たちのスタイルの素材となるものの多くは、商業資本やマスコミによってつくられた既製品としての青年文化から取り入れたものである。その意味では、かれらも商業戦略の単なるターゲットであり、消費者であるにすぎないと言うことができる。たしかに、H地区の青年のスタイルは、一般に若者のあいだに流行しているものをそのまま取り入れているという側面がある。しかし、かれらは、既製品としての青年文化を取り入れながら、自分たちに応じるような加工や変型を施したり、自分たちの状況に見合うような意味付与を行なうこともよくある。

たとえば、かれらもおとなと同じようにパンチパーマをあてるが、後髪は長くのぼした型にして、おとなとのちがいをそれによって示そうとする。また、東洋町はサーフィンのメッカとして有名であるが、そこにやって来る都会のサーファーと同じスタイルは決して取り入

れない。サーファーはかれらにとって、自分たちのナワバリを侵した敵対者だからである。

H地区の青年のスタイルは、一面では、流行としての「ツッパリ」スタイルを受け入れながら、他方では、自分たちの地域文化の中にそれを位置づけ、他とはちがった自分たちのスタイルを強調するという側面を持っている。かれらがスタイルによって表現するものは、地域文化の中にある「男らしさ」の文化を誇張するという要素を多分に含んでいるし、バイクを運転するスリルやそれにかける冒険心は、漁業労働に内在する「向う意気」や「肝っ玉」に一脉通ずるものがある。かれらはそのスタイルを通じて、親世代が担っている生活信条や労働エートスを代替的に学習していると言えることができるだろう。

かれらのスタイルは、地区外の人々から見れば、他の青年たちとはちがった、一見「不良っぽい」スタイルである。かれらがあえてそのようなスタイルをとるのはなぜか。このことは、かれらがおかれている社会的文脈を考察することによって明らかになってくるはずである。

6. 被差別の社会状況

H地区の青年の多くは、学校教育によって疎外された者たちである。勉学に意義を見い出せないまま高校生活をつづけている者、学校生活の退屈さに耐えきれず退学してしまった者、中学校段階で学校に見切りをつけた者、こうした者たちによってH地区の青年集団は構成されているのである。現代社会では、学校からの「落ちこぼれ」は、社会からの「落ちこぼれ」を意味する。人々から「落ちこぼれ」としてラベリングされ、白い眼で見られるだけでなく、かれら自身がそうしたラベルを内面化してしまう。正規のキャリアを歩んでいないのは、自分がそういう生き方をできない人間だからだ、という自己観念をいつのまにか身につけてしまうのである。

かれらにみられる独特な文化スタイルは、学校から疎外され、自尊感情を傷つけられた者が、それを取りもどし自己の存在価値を証明しようとしてつくり出したものだ、という生徒文化論的な解釈もある程度妥当なものである。しかし、かれらの反抗的なスタイルの源泉が学校の中だけにあるとは考えられない。むしろ、それぞれの生徒が背負っている文化——それは家庭や地域環境の中に内包されているものである——が、学校文化と葛藤をひきおこすことによって、その対立的関係が顕在化すると考えたほうがより適切なのではないだろうか。一般的には、階級文化と学校文化の関係、あるいは地域文化と学校文化の関係が明確なかたちで把握しがたいために、こうした局面を見落しがちになるが、H地区の場合は、被差別部落であることによって、その関係があいまいにされずに、典型的なかたちであらわれている。

少なくとも中学生の頃までは、H地区の青年は、部落差別の存在を自覚していない。しかし、

「ガラが悪い」とか、「こわい」とか、「言葉がきたない」という世評が、自分たちに対するなんらかの差別的な意味合いを含んでいることは、かなり早い時期から感じている。

いちばん腹が立つのは、おらが道歩きよったら、向うから来た者がおらを避けて横の道へはいったりすることよ。おららあなんちゃあ悪いことしちゃうのに、そんなことされたら腹立ってきて、そいつをなぐっちゃろかと思うぞ。だれでもそうやないか。

このように、たとえ「被差別部落」とか「部落差別」という言葉を知らなくとも、かれらは差別の状況を肌で感じる。

自分たちを取り巻く周囲の環境が敵対的で、抑圧的である場合（それが具体的な攻撃的行動をとるかどうかにかかわらず）、その対象となる地域には、「防衛的な体制 (defensive structuring)」が発達する傾向がある。B. J. シーゲルの指摘するところによれば、それは地域の文化的一体性を守ろうとする行動となってあらわれる¹⁴⁾。

親の世代が若かった頃は、現在よりも直接的で強いかたちで差別を受けていた。その頃は、H地区の相互扶助や共同体的なまとまりは、いまよりもはるかに強いものであった。しかし、特措法以後地区の生活水準が上昇するなかで、親世代は地区内の統合を強めるよりも地区外との交流を深め、両者の間にある心理的距離感を縮めることに力点を置くようになってきた。取り巻く周囲の状況が時とともに変化しているのであれば、このような親世代の態度の変化、つまり地区の性格の変化は、青年世代になんら問題を生じさせることはないだろう。重要なのは、差別をめぐる社会状況がどのように変化しているかである。

このことを示す一例として、再び表3を見ていただきたい。その中で、男子の地区外生徒は4人であるが、かれらはすべて地元の高校ではなく、高知市内の高校に進学しているのである。この年度に限らず、地区外の男子は、地元の高校に進学しない傾向が一般にみられる。M. ローゼンバークらが明らかにしたところによれば、青年前期における階層的地位の認知は、高い階層の者が低い者に先行する傾向がある¹⁵⁾。これは、社会的地位や身分にもとづく個人の態度形成を考える上で、重要な問題を含んでいる。すなわち、階層的に高い地位にある者は、相対的に早い時期に階層化された社会構造の存在を理解し、人間関係や社会的な交流において有利な立場に立つことができるのである。このような状況のもとでは、仲間集団へのそれ以外のメンバーの受け入れや排除、あるいは、他者に接近したり遠ざかるという行動は、高い階層の者が操作し、コントロールすることが多くなるわけである。

部落差別にも、この法則が適用される。早くから意図的に部落民としての社会的立場を自覚させているところは別として、多くの被差別部落では、部落民であることを認知する時期は中学生かそれ以後である。それに対して、一般地区の人々は、大多数が小学生段階で部落

の存在を知るのである。

野根でも、状況は同じだとみなしてよいだろう。H地区の親世代の意向とはかかわりなく、周囲の状況はさほど変わっておらず、「逆差別意識」というかたちでのH地区に対する新たな（と言うよりは、もともとの差別意識が表現のしかたを変えたものであるが）非難が生じている。昔のように露骨に差別的態度を示すのではなく、できるだけかかわり合いを避けるというかたちでの対応が支配的になってきているが、「被差別の状況」は残されたままである。

社会的な交際範囲が広がり、人間関係に敏感になる青年期には、このような「被差別の状況」は想像以上に重要な意味を持ってくる。意識化された状態ではないにしても、周囲の人々の差別を含んだ対応を見抜き、自分たちが目に見えぬ抑圧や非難にさらされていることを肌で感じるのである。

H地区において、青年たちが集団をつくり、独特な文化的スタイルによってその集団の存在を表示しようとする現象は、このような文脈の中で理解されなければならない。かつて、周囲の差別に対して防衛的な役割を果たしていた地区の一体性が、しだいに弱まるにつれて、青年たちは、それにかわる自分たち自身の「防衛的な体制」をつくり上げなければならないのである。

〔注〕

- 1) 高校進学率は、昭和38年には全国平均66.8%に対して同和地区生徒は30%前後であったが、昭和42年には全国平均74.5%に対し同和地区51.1%、昭和50年には全国平均91.1%に対して同和地区87.5%となっている（総理府編『同和对策の現況』昭和52年、187頁）。しかし、石油ショック以後は、全国平均と同和地区との差は拡大する傾向にあると言われている。
- 2) 解放教育計画検討委員会・小学校部会『被差別部落の子どもの学力実態調査中間報告』昭和51年。和歌山県教育委員会『同和教育の現状と課題』昭和54年。大阪大学人間科学部社会教育論講座（森実執筆）『桂小学校における低学力克服の取り組み』昭和59年。
- 3) 現在H地区から町会議員が2名選出されているが、いずれもこの第1階層に属す人である。
- 4) たとえば、「同和問題が今日まで残されているのはなぜか」という質問に対して、「部落に対する見方はそう簡単にとり除けるものではないから」と答えた者（一般地区住民）は、高知府全体では19.6%であるのに対して、高知県東部では23.2%、さらに東洋町では31.8%となっている（東洋町文化会館「東洋町同和意識調査」昭和58年、38頁）。
- 5) 東洋町内での部落と一般地区との通婚は、これまで数えるほどしかない。
- 6) 自民党系の「全日本同和会」の組織はあるが、名目的なものである。他に、「町同教」も組織されているが、実質的な活動をほとんどしていない。
- 7) 野根小学校は、昭和56年から3年間県の「同和教育研究校」に指定されたが、部落問題を前面に出せないまま研究期間を終えている。
- 8) 労働者階級の青年が、学校の中で展開する「反抗」については、P. Willis, *Learning to Labor*, Hampshire, Gower, 1977. P. Corrigan, *Schooling the Smash Street Kids*, London, Macmillan, 1979. R. B. Everhart, *Reading, Writing and Resistance*, London, Routledge & Kegan Paul, 1983. などのすぐれた研究があらわれている。これらの研究は、学校の中で示す「反抗」生徒の行動と階級文化とのつながりを強調しているが、階級文化が家庭や地域生活においていかにして伝達・維持されているかについてはあまり言及していない。

労働者階級の青年下位文化が地域に根ざして再生産されていることを明らかにしたものとしては、S. Hall & T. Jefferson (eds.), *Resistance Through Rituals*, London, Hutchinson University Library, 1976. G. Mungham & G. Pearson (eds.), *Working Class Youth Culture*, London, Routledge & Kegan Paul, 1976. H. Parker, *View from the Boys*, London, David & Charles, 1974. D. Robins & P. Cohen, *Knuckle Sandwich*, Middlesex, Penguin, 1978. R. Jenkins, *Lads, Citizens and Ordinary Kids*, London, Routledge & Kegan Paul, 1983. などの研究があげられる。

- 9) R. Williams, *The Long Revolution*, London, Penguin, 1965. (若松繁信・妹尾剛光・長谷川光昭訳『長い革命』ミネルヴァ書房, 1983年, 43頁)。
- 10) H地区内にある文化会館を会場として, 昭和57年から3年にわたって夏, 冬, 春それぞれ5日から7日の期間で行なった。その間に, 野根の中学3年生の70~80%が学習会に顔を見せている。
- 11) H地区と一般地区とでは, 境界の道ひとつをへだてて使われることばがちがう。いわゆる「部落ことば」が明確に維持されており, 一般地区の人々の中には, 「部落ことば」が差別の原因になっていると指摘する人が多い。
- 12) 「遊び」の時期がいつごろ終るのかについては, 青年と親のあいだに共通理解がある。だいたい高校卒業年令にあたる18才がそのめやすと考えられており, 失業青年もその年令になると真剣に仕事をさがすようになる。
- 13) ここでは, 「ライフ・スタイル」ということばを, ジェンキンスにの用法にならって, 「同一の文化的な集団に属している人々を一群のものとして際立たせるような, 社会的行動様式の観察可能な型」と定義しておく。R. Jenkins, *op. cit.*, p. 41.
- 14) B. J. Siegel, "Defensive Structuring and Environmental Stress," *A. J. S.* 76(1): pp. 11-32, 1970.
- 15) M. Rosenberg, "Functions of Children's Perception of the Stratification System," *A. S. R.* 36, pp. 235-249, 1971. イギリスでも, A. J. スターンと D. D. シーリングによって同じような結果が報告されている。A. J. Stern & D. D. Searing "the Stratification Belief of English and American Adolescents," *British Journal of Political Science* 6, pp. 177-201, 1976.

EDUCATIONAL ATTAINMENT OF *BURAKU* YOUTH AND ITS CULTURAL BACKGROUND

—Ethnography of a Rural *Buraku* Community
and Life Style of Youth—

Hiroshi IKEDA

On the whole, the educational attainment of *Buraku* people has been rapidly improving in recent years. But to reduce regional differences and to raise academic achievement levels still remain some of the important tasks of "Dowa Kyoiku" (Education for *Buraku* Liberation).

This is a study of one fishing village (*Buraku*) in the Shikoku Area, where the educational attainment level is far below the national average. At the beginning of this paper, the social structure of this community is described. And the academic achievement levels of elementary school children and the high-school enrolment rate in this community are presented. Although the living standard of this community has approximated to the level of the other neighboring communities, the educational attainment continues to remain far below. Accordingly, in addition to economic factors, we must point out some cultural and psychological factors which have presumably caused this poor achievement of *Buraku* children. These factors are as follows: (1) feeling of being poor relative to other people; (2) distrust of the benefits of an academic career and of knowledge given at school; (3) feeling of ill-fittedness to school life.

Because of this low achievement and inappropriate behavior, *Buraku* children become alienated in school. But, contrary to our expectation, junior-high school graduates look back on their school days not as boring and wretched, but as exiting and joyful. They sometimes demonstrated deviant behavior such as rebellion against their teachers, fighting, vandalism and group truancy, which caused disorder in the school organization. Through such resistance against school authority, they were able to feel as if the school had come under their control.

However, they are regarded as deviants in the perspective of school norms. Teachers define them as opponents to school authority, and children themselves are obliged to accept this definition in the end.

Comparatively they are more autonomous and enjoy their own life style in the community rather than in school. They create a unique cultural style to which they appropriate various sorts of materials of youth culture and impute them the meaning

of their own. The function of their cultural style is to intensify their group solidarity and to proclaim the existence of their group to other people. To understand the meaning of their life style, we must consider the severe prejudice and discrimination against the *Buraku*-people. As M. Rosenberg pointed out, children of higher status antecede lower ones by the perception of a stratification system in society. The former, therefore, is more advantageous in controlling the circle of their friends than the latter. In the situation where prejudice prevails, dominant people incline to keep aloof from subordinate ones, and contact only with their own group. Excluded from dominant groups, Buraku youth cannot help flocking together among themselves. This intensifies all the more their particular cultural style.

In order to change this situation and liberate themselves, Buraku youth should be made more aware of their subordinate social position in society. If they can't understand the social structure of discrimination, their resistance will not prove successful.